

汨羅の淵

聖帝 堯の娘は、姉妹で共に臣下の舜に嫁した。後に禪譲される舜帝である。姉の娥皇と妹の女英は、国内巡視中に亡くなつた舜帝の死を悲しみ、湘水（湘江）に身を投げて殉死した。湘江は長江の支流であり、洞庭湖に注ぐ。この二人を湘君と称し、湖の女神になつたと云う。湘君の祠が、洞庭湖の北西端の君山にある。楚江（長江の別称）が流れ入る湖一帯の広大な景色を詠んだのが次の李白の詩である。

游洞庭湖 李白

洞庭湖に遊ぶ 李白

洞庭西に望めば 楚江分かる

水盡南天不見雲 水尽きて南天 雲を見ず

日落長沙秋色遠 日落ちて 長沙 秋色遠し

不知何處弔湘君 知らず 何れの処にか 湘君を弔わん

もう一つ、洞庭湖に注ぐ長江の支流に汨羅江がある。中国戦国時代に楚の懷王に仕えた政治家、詩人の屈原は、主君に疎まれて彼の献策はことごとく退けられ、絶望してその河の淵に身を投げた。その憂国の詩編「離騷」は後世の国士に愛されている。

毎年、二月二十六日になると、昭和十一年に起きたクーデター未遂事件、通称「二二六事件」を思い出す。この青年将校達の決起では、「昭和維新の歌」（青年日本の歌）が歌われているからである。この歌は、昭和七年に起きたクーデター未遂事件、通称「五一五事件」及び昭和三十六年の「三無事件」（無税・無失業・無戦争の主張）の両方に加わつた、三上 卓が作詞した。

その巻頭に汨羅の淵が出てくる。この詩は往時の思想家、大川周明の著作や、詩人・土井晩翠の著作からの引用が多いと云われている。土井晩翠は漢詩調の、男性的な詩風である。

実は、筆者はこの歌を高校生の時に、赴任してきた若い漢文の先生から教えてもらった。先生からは、授業でこの歌を歌つたことはオフレコだと言われたが、その理由を当時は分からなかつた。今になれば、なるほどと思う。国家主義者の海軍中尉の歌を、教育委員会に内緒で教えるのだから。しかし、それだけでは無いことをこのエッセイの起稿を通じて知つた。何と、三上中尉は筆者の母校（旧制佐賀中学）の先輩に当たるのだ。実家は現在の佐賀大学がある、「本庄」である。だから、漢文の先生はコッソリ歌つて聞かせてくれたのだらう。なかなか勇敢な行為であつたのだと思う。

当時の高校の先生方は、元氣のある人も多かつた。「質実剛健」の校風を引き継いでいたからでもあらう。佐賀は「武士道」の

發祥の地であり、藩校「弘道館」を受け継ぐ母校の伝統がそうさせたのかも知れない。

さて、昭和維新の歌の、漢語調の詩風を味わつてみよう。

昭和維新の歌

作詞 海軍少尉（当時）三上 卓

昭和五年 佐世保軍港 一夜梗概作之時年二十四歳也

汨羅の淵に波騒ぎ 巫山の雲は乱れ飛ぶ

溷濁の世に我起てば 義憤に燃えて血潮湧く

権門上に傲れども 国を憂うる誠なし

財閥富を誇れども 社稷を念う心なし

あ、人栄えて国亡ぶ 盲ひたる民世に躍る

治乱興亡夢に似て 世は一局の碁なりけり

昭和維新の春の空 正義に結ぶ益良雄が

胸裡百万兵足りて 散るや万朶の桜花

古びし骸乗越えて 雲飄揺の身は一つ

国を愛いて起つ時に 大丈夫の歌なからめや

天の怒りか地の声か そも只ならぬ響あり

民永劫の眠より 醒めよ日本の朝ぼらけ

見よ九天の雲は垂れ 四海の水は雄叫びて

革新の機到りぬと 吹くや日本の夕嵐

ああうらぶれし天地の迷ひの道を入は行く

栄華を誇る塵の世に 誰が高樓の眺めぞや

巧名なにか夢のあと 消えざるものはただ誠

人生意気に感じては 成否を誰か論ふ

止めよ離騷の一曲 悲歌慷慨の日は去りぬ

我等が剣今こそは廓清の血に躍るかな

が事件に連座していなかつたかと、母方の祖父から随分と心配されたようである。

事件は数日で鎮圧されたが、真崎甚三郎大将は事件後に軍法会議で裁かれている。何せ、真崎大将と父とは同郷であつたし、面識もあつたろう。北一輝や皇道派の思想的影響を疑われたかどうかは確かではないが、多分、憲兵による身辺調査は行われた筈である。父はその後、満州、南京、北支、ニューギニアと、次々に外地を転戦し、本土防空命令により、辛うじて南方激戦地から身、戻されているので、事件の影響が軍歴に影響したのではなからうか。

筆者は戦後の生まれであるが、父は井上日召とか「一人一殺」とか、妙に詳しかった。一方では「共産主義に触れぬ者は知力に乏しい」との趣旨も言っていたのを思い出す。書齋には、北一輝の「日本改造法案大綱」があつたのを覚えている。

令和四年二月二十六日

ロシアのウクライナ侵攻の日に記す

大中正比呂

二二六事件が起つた頃は、陸軍は「皇道派」と「統制派」に派閥が分かれていて、皇道派の頂点は荒木、真崎の両大将であつた。決起した主謀者は皇道派の青年将校であつたし、筆者の父も当時

は丁度、三上少尉から五歳ほど年長の青年将校であつたから、父